巻頭言
＊

postコロナ時代の学びの行方

相原道子

2020年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に社会が翻弄された１年でした。2021年は変異型ウイルスの拡大がみられるものの、ワクチンの普及による感染の終息が期待されています。この間、三密回避、オンライン会議やテレワーク、ハイブリッド授業、デジタルトランスフォーメーションなど、それ以前には日頃使うことのなかった言葉が当たり前のように飛び交い、それとともに新しい社会が急速に形成されています。

学会や研究会も大きく様変わりし、ほぼすべてがオンライン形式またはハイブリッド形式になりました。移動時間がないことやオンデマンドで後日でも視聴できることから、参加者は倍増していますが、一方で会場での会員どうしの意見交換や情報交換の機会がなくなってしまったことは寂しい限りです。また、聴衆が目の前にいない演者の講演はどことなく冷めた淡々としたもので、臨床や研究にかける演者の熱い思いが伝わりにくくなったと感じるのは私だけでしょうか。若い人たちにとっての修行の場でもある発表後の質疑応答も、チャットによる質問では対面と比較して質問者の厳しさや温かさが伝わりにくいようにも思えます。

さて、現在私は横浜市立大学の学長として大学運営に携わっています。そこで、with/postコロナ時代の医学教育について少しご紹介したいと思います。まず、本学を含めた多くの大学では今年も大人数の学生の集まる講義室での授業がなくなり、オンライン授業が行われています。試験など学修評価が難しいものの、学生からは手元のデバイスで集中して受講でき、一定期間中は何度でも授業を見直すことができるようになったため、内容の理解度が高まったというメリットも指摘されています。横浜市立大学医学部では、一時見合わせていた対面の実験や解剖学実習を昨年度の途中から厳しい感染対策を講じた上で再開しており、病棟実習もワクチン接種後の今は日数制限なく毎日行われています。学生のクルズスや医局の抄読会等もZoom等を使うオンライン方式に切り替えられていましたが、以前より学生や若い医師が質問や意見を言いやすくなったというメリットがあり、今も多くがそのまま続けられています。さらに、学生はこの１年以上、医師を含む医療者が、病院という組織が、医学研究者が、未知の感染症のパンデミックにおいてどう対応したのか、どう戦ったのかを目の当たりにするという得がたい体験をしました。彼らが、今後どのような医学的な脅威が訪れるか分からない世界を生きていく上で、医師として医学研究者として社会を支えられる人材に育ってほしいと願っています。

今後、感染が収まったあとも、すべてが以前に戻ることはあり得ません。医学教育も臨床現場も何をコロナ前に戻し、何を新たに発展させていくのか、これからの数年は多くの事柄で選択が求められます。激変する社会の中で試行錯誤を繰り返しながら、医学界も前進する道を模索することになります。

最後に、神奈川県皮膚科医会の会員の皆様には長年に亘り教室の長としても個人的にもお世話になりましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。これからも神奈川の皮膚科診療の発展を願っております。

（横浜市立大学　学長）